

文
學
叢
書
第
一
卷
第
一
冊

間塾捷魚様

澁川省夫

菰

道

道 夜

夫 士 富 川 瀧

序 夜 母 梅 孤 錯 祈 秋 枯 晚

の の

詩集

詩 雲 詩 雨 獨 覺 禱 日 松 秋

.....

三 三 三 七 六 三 三 二 〇 九

夜道 目次

跋 文	序 文	扉 字
高 島 田 伸 介	池 澤 春 喜	岡 本 彌 太
		高 村 光 太 郎

昭和八年一月刊行

願歸風

望路

.....
.....
.....
.....
.....
.....
.....
.....
.....
.....

一三〇
一一八
一一五

冬童室家妻黃砂砂砂出阪龜
戸の

陽話岬中昏發

.....
.....
.....
.....
.....
.....
.....
.....
.....
.....
.....
.....
.....
.....
.....
.....
.....
.....
.....

二四
二三
一〇七
一〇五
一〇四
一〇〇
九七
九六
九三
九〇
八七
八六

序

寒くして咲くものは、常に時の厳しさをつらぬく凜乎の芳を、おのづからにして早く貯へてゐる。生の限りない憂愁の盃を早くして銜む者の眸は一見寒い程な晶質の愛を深くつゝみ、その素朴流露の姿態のふところに、鐵火もゆくべき鑄銳の一徹を閑かにおさめてゐる。

詩集夜道を書いた人性は實にそれらの一人であり、彼の詩は謙虚な沈黙のうちにそれらの深い慧智の相を備へてゐる。

彼は市井の狂める塵勞のうちによくおのれの重たいよろめきを支へて果しない群像のうちにあるおのれのみを裸像のありかを辨別する聰明と、厳しく自己の本質を追ひ詰めて点描してゆく抑制の藝術裡に、尙あらゆる角度の生活への殉情を惜しまない態度をもつてゐる。

この餘りに處しい詩の抄々が時の厳しさによく耐へて泌々と潔白な人性の花の色を深く

してゐるのは、たゞに一朝暮の詩技の苦しみだけでないと識る人はその斷片のうちにも、その背後に潜むものに深い眼を興へるであらふ。

詩集夜道の名にふさはしいその背後の心理的苦慘の歴史については、己れもよく識つてゐるが、凡そ彼はそれらについて語られ度くない藝術決意に殉ずる覺悟をもつ人性だし、自分はそれら幼くして浴びてきた人性の洗禮についてはひたすらに黙し、彼の噓れて後やむ詩生活における不脱の輝きの將來に目をやらふと思ふ。

瀧川はいま、市井の一商賈としても雄々しく父祖のみちをその若冠の雙肩に受けて塵勞のなかに一家及自身の嵐のうちの羅針を執らねばならぬ立場にある。彼はそのために世慣れない異端の性に鋭い鞭を興へて常凡な生活のうちの眞をさぐり、鐵火のなかもゆくための詩筆を研いでゐるのだ。

詩が單に机上青春の戯れでないためには、更に詩の生きたる肉體の息吹きを備へてみる

ものの胸に来るためには、先づ詩よりもその人が如何なる程度の垢塵の人生苦を實踐しつゝあるか、それを如何に體得しつゝあるかが、われらの藝術における命顯の根本であらなくてはならぬ。才は一夕にして盡き、流行はあしたの墓穴の上に立つのであらふ。

瀧川は自己の存在のためにソリダリテの假面をとらない良心をもつてゐる。知も不知もやむにやまれぬ時、彼は如何なるところへも身をもつて動き去るおとこである。私は信じじてゐる。すでにそれら夜道の虞しい底を流れてゐる鋭い交流をみてゐる。彼は愈々常凡の平服のもとに、かれ本來の素朴鐵石のような熱い人間の書を書きつゞけて大きく動いてゆくのであらふ。そしてかれの一見靜穩な詩風のうちに次に來るものゝ新しい統制への眼を熱く輝かせて移つてゆくのであらふ。彼の主宰した詩誌鸞の鐫鏡に悶へた方向が何であつたか。彼を知る自分はやがて人々がそれについて眼をみはる日をその藝術の行手に穩やかに心より信じてゐる。

詩集夜道一卷が實にその出發の前夜の書であるため、只に彼のみならず彼の熱い友愛の若い一團のために錯雜した希望の感懷をおさへながら、この若冠にして雄々しい業績の第一歩を廣く歡んで貫はふとこゝに貧しい序をしたためる次第である。

昭和七年霜月

岡 本 彌 太

夜

道

序
詩

幹を肥やせ

ザボン

しろびきて

おのれの重量に倒れるな

夜の雲

灯りとぼして

誰か人でもゐるような

山脈やまの上

しづかに流れる夜の白雲くも

母の詩

山をへだてて

遠き未明の空のほの明るみを

冷い夜更の床に信じつつ

わづかに遺る木の葉のいちまい一枚を

風雨の中から拾つてきては

母は

子らの寢床を暖める

朽ちはてた爪跡に沈んでゐる
その母のおとろえはどこからくるのか
とほしくなつた瘦骨に燐々と尙も焔を焚せて
只一筋に生きようと願ふ母

絶えまなく吹き荒さぶ風雪
吹雪はそのまま霜となり
清らかに母の頭上に耀いてゐる

梅
雨

濡れた空氣が
部屋いつばいにひろごつてゐる

暮れて間もない夜だのに
お通夜のようなこの静けさ

誰も来ないので
寝ころんで天井板など敷へてゐる

二

枯れた立木の梢に
雀が一羽うづくまつてゐる

孤
獨

裏庭

背のびした松の新芽に
鋭いたみを感じてゐる

錯 覺

塀の並んだ屋敷町の盛上つた道路で
そのひとは
とても大きく見えました

濠端にでて芝山の邊りで近づく
さつき見たひとより
ずつと小さく見えました

祈 禱

白銀の氷河をしいて
空遙く

月の光はこの窓にうつらない
いつか

風の流も昏迷の地底に墜ちて
夜は蒼然と寂莫の冷氣の中に沈んでゐる

障子紙

脱はぐされた隙間から洩れる嘎れた咳
いちまいの敷布の上

今宵も黄ばんだ五體を横えて苦しむか母よ

冷酷な風雪の底に焚す恩愛の焔

子らのむなしい願望ねがいの下で

干物のやうに老いしなびてしまつたあなたの咳

空の蒼さに

陽の明朗なゆりかごに抱かれて

わたしらこんな大きく成長した

だのに

あなたの上に咲かせた花はひとときの微笑すら與えやうとはしない

遠い昔のままに傾いた壁

暗澹と

この陋屋の燈火に翳るあなたの身のおとろえ

母よ

たとい枕邊の薬は乏しくとも

あなたに捧げるひと瓶の牛乳にこと缺ぐとも

子は祈つてゐる

蹠と深みゆく夜をこめてあなたの子は祈つてゐる

秋
日

風の劇しき日なり

障子をとざし机に向へど

雲の如く

吾が五體を劇しく風の流るる日なり

枯
松

雨に折れ

風にゆがみ

瘦身に今は虚しく緑松の錆さえつけて

曇天

枯^ま松は闇雲の下でもう動こうとはしない

晩
秋

鶏が五六羽

道端の乾いた地面をほつてゐる

子供が一人

大根の葉をさげて路地から出て来た
跛であつた

くづれかかった板塀に
陽が少しづつ傾いてゐつた

戀 愛

憎むことのできないのは苦しい

だが

愛することのできないのは更に苦しいことだ

深夜

深夜

吾がこころを踏みて去りゆくものあり

何物の影なるか

この日頃

鬱々とわれ眠むられぬ幾夜よさかおくるなり

松林に來て

I

風の劇しき日なり

松林歩みて

われ

ちさき一莖のたをれし草花を見たり

年月の風雨に歪みて歳経たる松の根方に

II

秋晴れの好き日なるに

けふの風なかなか劇しく

松林に

われ高き浪の音をききて遊べり

手に光る小刀ナイフなどもちて

松林歩めば

こころはほのかに

松林歩みて

吾が影をたのしむ

III

III

松林歩めば

われいつか松林をぬけて草深き墓場にいでたり

墓石に腰を下して
只蒼きひといろの空みつむなり

蝨

I

砂礫に埋る一塊の赫土

類浮陀の懿戒

蛟龍の夢

II

敷聞の阿僧祇

くるり

反轉して臉を閉ぢる

III

砂の中

砂を嚙み

砂の中

秋

天心に懸る 月

キラリ

孟宗竹の葉に夜露が光つて

海 邊

— 木村嚴夫氏に —

風の劇しい日であつた 僕は砂濱の窪地に腰を下してゐる 灣曲に屈折した
海は 午前の遮る雲もない陽を真正面に映して

浪の響に交つて 登音かと思つた 耳を澄ますと颯々と松籟が砂埃に荒され
た柱ばかりの掛茶屋のトタン屋根に松葉を落してゐる。時々鳥の鳴聲も聞えて
くる

巍立した巖礁を廻つて 小舟が風に逆つて西に航行く外 見渡す限り人影も

ない荒涼たる二月の海邊

昨日届いた書物の終結が来た 再び懐にして僕は立上る 岩端の松に翳つて
陽は閉ぢられた頁のように彩着いてはゐるが 見えなくなつた小舟の外 吹き
止まない風と時々鳴く鳥の聲と 僕と 海邊は寂れた姿のまま傾いた斜面を
終焉に急いでゐる

幾日かの苦しみを海に投げ捨てても 尙暗い悲しみが胸元に滓のように遺つ
てゐる

こんな風の日には 友も屹度高熱に喘いでゐるだろう 幾百年の風雨に歪めら
れた松林の幹の間に 次第に遠ざかつてゆく振り返つて見る海の蒼さに 陰慘
な友の風貌が雲の如くに浮んでくる 衰えた指先で愛撫せられたであらう懐の
書物を押えて 僕は逃れるように渡船場に走つた

秋の櫻

黄昏の空の下で

私のみたのは

ちいさな佛陀でした

白い衣を着て

きちんと

つつましく櫻の枝に坐つてゐました

鐵の轡(病床篇)

その

寝不足の臉の翳に

遺されるものの青いおのきをわたしは視た

やまいの床は

水溜りのように落窪んで

わたしはわたしの五體をその中に失つてゐる

痛ましげに

おまえ

わたしをそのように視凝めてくれるな

あれは雨の音だな

あれは風の音だな

もう

次第に遠ざかつてゆく曙の石の光は追はぬ

焚えさかる青い恩愛の焔も

黯澹たる嵐の中の晦冥の涯に沈み

今は

氷河の如き荒涼の天地が茫莫とわたしの周囲にひろがつてくるのみだ

哭くな

つめたい雪を褥に幽冥の山野を越えて

わたしはわたしに科せられた鐵の轡の下で最早や微動だにしない

離脱なれてゆくことの

實に清淨な静けさに抱かれて寝むるのだ

瞑
想

雀でも飛び去つたのであらう

しづかな黄昏の裏庭を

波紋のような羽音がよぎつてゐつた

障子のうちらで

わたしは又 おのれにかへる

明
暗

壁ひとへ

この隔りのうちそとで

明暗とは

いづれの世界をさしていふのか

冥府あふで死んで

私がこの世に生れたものでないと

誰が斷言することができよう

夜
道

月があるので

道はほんのり明るかった

時々吹いてくる涼しい風が

河端の雑草を鳴らしてゐる

雨戸を降ろした低い家並にそうて

所々 くづれた杉垣があつて

そこから遠い街の灯がちらばつて見えたりした

袂の中には

土産に貰つた卵がころがつてゐる

僕達はめいめい黙つたまま

薄暗の部屋での和やかな團欒を思いながら歩いてゐた

孤獨

冬子ヨ 益子ヨ 桂子ヨ

僕ヲ捨テテ行ツテシマツタオ前達ミンナヨ風ガ冷タイ

吹晒シノカーテンノ影デ僕ハ今夜モ酒ニノマレテキル

オ酒落ダト云ツテ

ソレデモ笑ヒナガラ焼銀ヲアテテクレタ黒髪ハモウ誰モ見テクレル者モナイ鳥ノ巢ノヨウ
ニ黴臭クナツタ

オ前達ガ感激ノ頂ニアル時

僕ハ忘レテキタ自分ヲ見出ス ソシテソノ時ガイチバン孤獨ヲ深ク味フノダ

偽リノナイ心ニミンナ砂埃ヲカケテ去ツタ

ワカラナイオ前達ハ幸セダ

酒ガ少ナクナツタ

唄ハナイノデ女達ハ向フノテーブルニ去ツテシマツタ ミンナ騒イデキル 何ノ意味モナイ
イ歌ヲ面白ソウニ唄イナガラ

火ノ氣ノナイ六疊ノ部屋ニ アア 僕ハ今夜モ歸ラナケレバナラナイ

野良犬ノヨウニ 現ナキ肉體ヲ引摺ツテ

冷たい寢床デ

眠ルコトヲ忘レテ習慣ノ隋性デ僕ハ呼吸スル
ソシテ 又餘白ノヨウナ朝ヲ迎ヘルノダ

偶
作

羞しいのではない

恐ろしいのだ

皆

着物などきて

ここでは

裸體を隠してゐる

渡船場

水も空もひといろに染められて、港に近い内海は劇しい雨のままに黄昏れてゐた。深い霧の中に、幽かにそのなぞえを見せた山は大きく廻つて、次第にその姿を對岸にのばせてゐた。山に抱かれて、ひとめに收る部落には、點在して今にも消えそうな灯が明滅またたてゐる。

巡航船ふねは、笈ふを擔つた濱の女や、教員らしい詰襟の男や、僅に三四人の乗客

をこの渡船場に降ろして、遠く又雨の中に沿岸を廻つてゐた。暗い待合室では、歸らねばならない家の事など考へてゐるのであろう。みんな黙つたまま窓硝子を敲つ雨の音をきいてゐる。

秋夜斷章

I

忍び足で

猫でも通つたであらう

庭

鳴きやんで

また鳴きしきる虫の聲

II

芒の原に月が出た

はろかに

この草原の涯の涯に

冥府への道がありわしないか

佛手柑の梢を鳴らして
風のしらじらしさ

III

灯の下で
身にしみる 秋の蚊

III

竹垣の
笹の葉に光る 露

ころがりながらきらきらとまぶしく
おれは何にも云へない

V

月の見えない
月夜の明るさはいい

黙つたまま 君と僕
ぐつしより濡れた白壁の匂を嗅いでゐる

VI

山脈を越えて
北え
漂々と流れてゐる 白雲

白雲よ
そんなに遠く只孤りで
月の夜道はさみしいだろうな

みかんの花匂ふ夜

もうこの邊りはすつかり寝沈つて

水底のように静かだつた

机に向つて

私は幾度原稿紙を破り捨てただろう

書きあげ得ないもどかしさに

すつかり夜を更かせてしまつた

障子がうす青く明るんで

外は月夜らしい

窓をひらけば

みかんの花が匂つてくる

白い匂の中で

私は何にも書けなくなつた

瞼を閉ぢて

もう自分の周圍に花ばかりを感じてゐる

秋の櫻

障子のすき間から

黄昏の庭を見てゐたんですよ

遠い地の底のことを考へてゐたものですから

阿呆のようにひとところを視凝めて

ふと瞼をあげると

枝ばかりの櫻の木に

二つ三つづつ

秋の花が咲いてゐたんですよ

すこし羞ぢらつてね

血
縁

私が姉の夢を見るように

姉は私の夢を見るだろうか

四郎の許に行きます

そう云つて死んでしまつた姉

あの世では

姉弟仲よく暮してゐるのか

何でもなかつた顔で

あるいは

お互が知らずにゐるかも知れない

愚かな習慣

雨のままに黄昏れてゐつた。トタン屋根を打つ雨垂れの音、隣のラデオ、電車の響、静かな、騒がしい六畳の部屋では、落着けない焦燥^{いらだ}たしさに壁土を這つて迫つてくる夜の中を僕が歩いてゐる。檻房に馴れない囚人のように。

動かない家具。そつぽを向いて化石した書物は既にこの部屋の飾に過ぎない。

散らばつた原稿紙の屑。埃のたまつた窓際の机。

激しいものが僕を縛る。僕は机に向ふ。ペンを取る。ペンを投げる。遁逃する理性を追つて争鬭が空洞のように僕を置忘れる。

いつか、僕は鏡の前にネクタイを結ぶ僕を発見する。

別
離

みんなに負けないでしつかり御勉強してね
冷たくなつた盃を握つたまま

青いシャンデリアの光の底で女の唇が小刻みに震えてゐる

幾月もの自墮落な生活

かりそめの戯れが既に忘れられない女となつた今
僕は

女の心根をいとしく思いながら

離れてゆくことの苦い寂寥をアルコールにまぎらせてぐつと飲みこんだ

負けちあいけない

おのれ自身の爲にも

もう

どうにもならない生活であることは

所詮 つながれた血肉の鎖を断切る外どうしやうもない泥沼にうちこまれた杭
ではないか

冷たい部屋を逃れて酒に酔つたとて

何れは歸らなければならぬ更には白けたおのれの部屋だ

砂の中の生活

噛みしめて

砂の味のわかるまで僕は暗さの中でじつと生きぬこう

さやうなら

酒に足許をすくわれなくなれば又會う

その時こそお互の生命にふれて抱きあへるのだ

レコードについて甲高く唄ふ女

淋しい女の横顔をじつと視凝めて 僕は胸底に鳴る強靱な鞭の響を堅く掌にう
けて握りしめた

生の眞實

懸崖きりぎりしの

水も透らない岩肌の窪地に

一本の

松が生えてゐた

青々と

その針葉を空にかがやかせて

春日

人氣のない道端

古い箱の上に蜜柑を盛つて

一山五錢の立札が卒塔婆のようにそえてあつた

白く

どこまでもつづく土堤の一本道

柔らかな芝生がもえて

その下を流れる小川の道が鮮魚の背のように光つてゐる

偶
作

聾が大きな聲で話をするのは

人に聞えないのを心配してではない

自分に聞えないと不安なからだ

たといその言葉が日常茶飯事のものであるにしろ

要點はそこにあるのだ

人皆

常にかくありたいと思ふ

毒 矢

あざけりて

こころやすらかなればゆんづるをひけ

われ

きみのどくやをうけてそういにみつるとも

きみをにくまず

よに

おのれをまもるものひとにかんせず

やをつがふ

きみがゆんでにひそむよわきころよ

かなしきさがよ

龜

笑ふ奴には笑はせろ

世間の思惑なんか考えてゐられるか

抜け出した跡でどうなろうと構わぬ

骨が碎けてもいい

俺は甲羅をはづすのだ

阪

雨上りの田舎道なり

梅檀の並木に翳り

陽は五月の空にゆんづるの如く耀けり

赭土のしくじみ匂ふ

轍の跡のはげしき阪道

荷車をひく若者を見たり

たくましき若者なれど

汗ばみてその登り苦しげなりき
車に積み重ねたる野菜

野菜の隅に母なりや年老いし婦　ちよこなんと坐るを見たり

人は思ふや

こは美しき情景なりと

されど吾が心幽かに不快を感じ

八十の阪越す老婦なりとも

一筋の藁の如きかぼそき力なりてもよし

吾子なれば降りて車の後押すものを

まこと人の世の慣習なりとも

なべておのれの権力を強いることの醜さよ

あゝ

緑の風におくれ毛をなびかせ

平然と車に坐る老婦を乗せて

苦しげに若者は尙も阪を登りゆくなり

出 發

嵐に抗する用意は出来た

×

海が暗いからつてためらふな
朝の後には夜が来るだろうし
死ぬまでつづくこの海原
浪の荒れるくらいは覺悟の前だ

×

飛沫しぶきにさらはれないように氣をつけろ
右に傾けば左に廻るんだ

さあ

しつかと舳を握つてわきめをするな

×

巖にあたれば骨でください
帆が破れたら皮でつなげ
道は暗い程い
闇は胸の炎で消して進むのだ

砂

汐に流されて朝がきえると

空が蒼いと思つたのは、いつのまにか夜になつてゐたからであつた
水を透して

月だけはこの岩影の窪地にもささやかな光を投げてくれる

つめたい水は

月の光のとどかない僅な隙間にさえ荊あるその身をひろげるのだ

荒れ錆びた藻草の下のあけくれのいとなみに

暗い年月の苔が

もう　こんなに青く掌にしみてしまつた

つぎることのない

息苦しいこの水底の濁りの中で

もはや

渦ばしる海瀟の音はきかない

夜が

どことなく濡れた光とも翳りひろがると

頭上をよぎる凡てのもの白い影ある庭のみ視凝め

おのれは醜くゆがんだ頭骸骨を太らせる

道は

短い夜の涯から暗くなる

劇しい浪は

きのふの如く夜明の後におのれを待つのだ

ああ 沓く引汐に流されてゐつた暁の鞭ある夢よ

おのれの行方に今は耀くものをまるで思はない

おのれにつながるものをおのれの重量となし

遅々として

果てしなき荒海の藻草をくぐるのみだ

砂

夜闇

ひそやかに何を語るか

啞のごとく黙る

天地のしづけさのなかに

さらさらと

ああ さらさらと砂のなだれよ

砂

I

石を割ると

石の割目に砂がひそんでゐた

砂は

彈丸のように身構へてゐた

II

掌に乗せて

柔い砂

握れば

ぐつとはじきかへす強靱な力

III

眼をとち

口をとち

砂は唾ではないのだ

敲けば

全身に響く 火の言葉

黄
昏

だんだら模様

陽は

重疊の山に深い明暗をいろどつてゐる

櫟林をぬけ

はろかに

山巖をまがりまがつて

遠くまた林の中にきえてゐる 道

りんりんと

鈴の音が木の間にしみて

落葉に暗い山坂を

谿川の流れにそうて登つてくる遍路一人

黄昏の

沈む陽のなかにのみうつるあの険しい頂を越えて
その道はどこまでつづくのか

長い旅路の

風雨にうたれて葉裏のようによごれた無垢の白衣

山は

谿谷の流れの音とひそやかな風の中に暮れてゐる

そこから邊り

草叢には曼珠沙華が火華のように咲いて

せつなく

おのれに唱へる遍路の聲が

深い谷間に夜の鳥のように飮してうすれてゆく

南無大師遍照金剛

南無大師遍照金剛

妻

風吹けば

風吹くままに

かたくなの夫につかえ

素直なる妻のころよ

叱りつつ

つい しぢらしく

家の中

障子の暗い家の中で

男は

黙つたまま机に向つて何か書いてゐる

その側らで

裕の針を連ばせてゐる 女

石厓の下で冷たく逝しんでゐつたのか
もう虫の聲も聞えなくなつて
障子の外では
家をめぐつて夜更の風が鳴つてゐた

静かに針の手を休めた女は
かすかに蠢めくものを身に感じながら
動かない男の横顔を視凝めて
じつと風の音に耳を澄ませてゐる

室戸岬

1

榕樹の森にそびゆる
白堊の燈臺

海は真下に
巖を咬む潮の響なりもひそめず

2

千疊の磐石にまむかい
想ふことあまりにちいさければ
われ 黙して立てり

108

3

屹立する巖礁のさけめさけめに
いざらしや
きいろなる花など咲きて

109

空渡る

季節の鳥か

懸崖きりぎりしを斜しに黒く

ひとかたまりのよぎる翳あり

巖礁を傳へば

岩の窪みにわづかなる水溜りあり

いつのほどか來りしを知らず

縮模様美しき小魚住めり

荒海の浪の音真近にきこゆるに

小魚ら

喜々としておのれの世界に生きてあり

童話

窓下の植込に

この頃 時々螢が飛んできた

妻は

螢をみつけると

田舎ささのことをいろいろ話してくれる

私は

書きものの手を休めて
妻の童話に耳を傾ける

冬 陽

雪雲は

遠く迎つてきた道をうしろに流れてゐつた

たえず

おのれをおそふ

あのつめたい流れの音にも馴れて

橋の上には

ほそぼそと冬の陽が翳りはじめた

風

柁の葉先に傷けられまいぞ

風よ

その上は

そつと 忍び足でわたれ

歸
路

一

杉や樺の繁みをぬけると

もう村の灯も見えなくなつてゐた

トマトの籠をさげた妻を自転車にのせて

私はゆつくり坂を登つてゐつた

しんしんと虫の音が邊りをこめて
道は眞晝のように明るかつた

一升徳利や風呂敷包を兩端にくくつて
その男は天秤をになつてゐた

虫の音のしげい峠の端であつた

「今晚は……」

そう云つて見知らぬその男は

熊笹の茂みを曲つて村の方えすたすたと降りてゐつた

街からの歸りであらう

玉蜀黍の畠を抜けて雑木の影に見えなくなつたかと思ふと
もう麓に近い坂道を

蟋蟀のように小さな影を踏んで歩いてゐる

跋

願
望

多くを知りたいとは思はぬ

只 雀の言葉だけでも理解したい

おのづからを八大地獄の上に架せられた砂橋を歩む龜として、常に激しい潜熱の征箭に坐して来た人間。

瀧川の第一詩集*夜道*の上梓、この喜悅に、この藝術の全貌。夜道のくだくる涯に白く香る花をみ。彼れが腕の筋々に今更の如く感涙を覺えずにゐられない。

まさしくこれは瀧川が夜道に咲かす氷華だと想ふ。

人間主義餘りにも理想主義を多く持つて来たわれわれの若き足場に、正しいものの激しい看取を、未來へのよき展望を、こうしたものを豊かに持つ瀧川の透徹した愛の闘争を、私は明日の眞摯さなくしては語れない。

ひしひしと迫る暗い彼れが重量は私迄も倒そうとする。

彼れは家庭に疲勞した、彼れはそれを知らうとしない迄に自れを刻み、壁に吹きつけるものを凝視し。自れを憎み、その荒涼の野にはだかつて又彼れは愛してゐた。

私は此のよき兄者を最も近くに持つたことを喜悅としたい、そして彼れ瀧川の*夜道*が世の諸彦の前に眞價となり、正しいものの道として現れくることを信じ見まもるものがある。

莫逆の友瀧川が、その第一詩集「夜道」を世に送るに當つて、私は極みない喜悅の中にむしろその人間眞の悲壯に打たれて涙さへ禁じ得ないのである。

私が瀧川を知つての時は極く浅い。僅か二年の友誼ではあるが、その間、瀧川が存在が、私の詩生活の上に、そして私の人生にもたらしたものは、私の生涯を通じて永遠に消へ去ることのないであらう温い人間眞の裸の美しさそのものであつた。

世に心友といふ言葉があれば、瀧川はまさしく私の心友であり眞友である。

今、私は瀧川の詩を語るに當り、人間瀧川を置いて他のなにごとをも語ることは出来ない。瀧川のいつはらざる姿そのものが瀧川の詩であり、瀧川の詩即ち瀧川が人なればこそ書かれたものでなければならぬ筈である。

瀧川の詩に接するものゝ先づちんと打たれるものは、その詩に對する彼の態度の眞摯さであらう。おのれの社會に對する正しい認識、人生といふものに對する限りない熱情——

それらのものが、彼の詩の悉くを通じて渾然と一つの花の輪となつてゐる。

瀧川はまた極度に世の一切の惡を廢する。そこに彼の正義が沸々と湧き立つのである。

然しながら彼は、惡に報ゆるに常に善を以つて當るのである。それは人間なるが故の彼の弱さであると同時に、眞の人間の涙を解するものゝみの知る、清い純情であらねばならぬ。

私が瀧川の詩に頭のひとり下る理由はいろ／＼ある筈であるが、彼が詩の世界といふものに對して如何に靜かな憧憬を抱いてゐるかといふことがその最たるものであらう。

喧騒と雑踏との眞只中に商賣をしながら、彼の眼が、彼の耳が、如何に注意深く大自然の靜けさに向つて注がれてゐるか。彼の眼に映じ、彼の耳に響く全てのものは、彼の心を通じて、大自然の悠遠の美となり、大自然の祈りの聲となり、そこに彼の詩は、ゆるぎない現實の大地の一角に深々と湛へられた湖の姿となつて生れてくるのである。

私はまた、人生といふものに對し、詩といふものに對する瀧川の純情にも、はるかに頭を垂れざるを得ない。彼はみづからの清さに一點の濁りすら寄せつけない。そのあまりにも純情なるが故に、或る者は彼の詩を逃避であると云ふかもしれない。それでよいのだ。ころあるもののみは彼の純情の内奥に、ひそかに點され、皎と輝く人間眞の不滅の光を見逃しはしないであらう。

それ等善きひとびとと共に、心友瀧川の詩集「夜道」の發刊を祝し、その眞、善、美の藝術境に私は浸りたいと思ふ。

一九三二年冬

池澤春喜

後記

詩集夜道は過去二ヶ年間の作品中より、作品價値の如何を考慮せず、私に近いもののみを集めて採録した。

私は多くもないこれらの詩を、暗らい帳場の隅つこで書いたり、又夜更の部屋で獨り更けるも忘れて書き續けて來た。人々は私をどんなに想像してゐるだらうか。曉の霜を踏んで、破れズボンに小倉の詰襟、そして身に餘る荷物を擔つたり、金鎚を提げて函を敲いたり、又時には寒風の巷を自轉車で飛ばせたりする私の姿に驚きの瞳をみはるのだつた。勞働の神聖は知つてゐる。然し己れの道に逆いて現在を生きなければならなくされてゐる私には、餘りにも苦しい一日の長さである。或る時は灯の巷をさまよい、又或る時は考へあぐんで病人のように眠り呆けた秩序なき、それこそ眞實泥沼の蛆虫同様の惨めな過去、そう

して辿りついた詩作生活はまだ昨日の如く感ぜられる。詩は私に取つてはその初から一つの宗教であつた。そして時には私の影となり、實體の倒影を苛酷な均整を持つて映す變身であり、又私を引摺つてゆく驪のようなものであつた。

私の生活は、私の詩は、私自身との闘争である。私はそうして、この道を己れの道としてこれから先も歩まなければならない。恐らく、それ故に詩は私から離れる事はないだらう。

汚いなき生活、この中から又私は青い空を、月夜の野良を憧れた。人々は、否私の生活を知悉する者は夜道の詩を歸路の詩を單なる空想だと笑つてゐる。然しその笑ふ人々の捨ててゐる日常生活の中から私は私自身の憧れを拾つてきたのだ。自然は私に取つては魂の安息所であり、又心の在家でもある。暗闇の窓から覗く黄昏の空の色、荒涼たる砂原に生えた一本の草の何と美しく感じられることか。

○

この詩集を、私は詩壇的に賣出そうなどと大それた意圖のもとに上梓するのでは決しない。そしてこの詩集に私の全貌がある譯でもない。反對に幾人もの私を人は見出すであらう。一つの信念に基づく過去清算、一つの道を探り得た後の多岐なる道の沫殺、むしろこの詩集は私の背後を閉す扉となるのであらう。

○


この頃思ふ事切なるは平凡にあり度いと云ふ事である。心の疲れかも知れぬ。然し結極人は人に歸るのだ。人間を離れて人間え、その爲にはこの殻をふみにじつて更に道を急がねばならぬ。中途半端で私は噓れたくない。

○

本詩集は私を導き、絶えず見守つて下された岡本彌太氏、及び鸞をめぐる同人諸兄の激勵によつて生れた。東都よりはるばる暖い息吹きをおよせ下さつた高村光太郎氏、更に御多忙中序文をお書き下さつた岡本彌太氏、肉親以上のつながりを感じてゐる池澤、高島田の跋、千萬の氷の如き眼窩の中に、これら心美しき人々の御厚情に私は涙なきを得ない。記して感謝の意を捧げたい。

昭和七年極月

著者

發 兌 所 高知市蓮池町二四ノ一 聖草詩社		昭 和 八 年 一 月 十 五 日 印 刷 昭 和 八 年 一 月 二 十 日 發 行	百 五 十 部 限 定 定 價 壹 圓
		詩 集 夜 道	著 作 兼 刊 行 者 高知市蓮池町 瀧川富士夫

